王さまマックロイ

ふなざき よしひこ 文
ハインス・ヴィルヘルム 絵

俗学社
これが主さまマックロイ。
なにしろ わがままな主さまです。
たとえばマッカローは、まいあさデラスへでて、
ここじゅうのもに、ひとつこえ、
『クワァ』と、よびかけます。

そんなとき、王さまは、みんなが
「プラボー」
「プラボー」
「王さまは、なんてうつくしいこえなんだ」
と、いわなければ、きにりません。
まだ、マックロイは、あきらしいふくをこしらえるだけに、しろのまわりをねりあるります。

こんなとき 王さまは、くにのものが「プラボー」
「プラボー」
「なんてうつくしいぶくなんだろう」
「でも そのふくよりも 王さまの はねのいちのほうがずっとみごとだ」と、いわなくては きげんがわるいのです。
そんなある日、マッロイは カナリヤのくにからおひめさまを さらってきました。
「ブラボー」
「ブラボー」
くにのものは こえをあげました。
「主さまのいきおいは、なんて大したものだろう」
マッロイは、それをかいて
ますます 気軽をはりました。
けれど、みんなは 家にかえて とびらをしめると、
「やれやれ」と、ためいきをついたものです。
どこか その日から、このくにで たったひとり、
王さまのごきげんをとろうとしないものが あらわれました。
それは ほかならない、カナリヤのくにのおひめさまです。

おまけに このおひめさまたちたら、マックロイのことを
しばしば「からすのおじさん」などと よぶものですから、
王さまは ほらがだつてなりません。
そこである日、マックロイは こっそり けらいを
よびあつめると、こう もうしつけました。
「よいか、こんや ひめがねむるごろ、おまえたちは
おばけのかっこうをして へやに とびこむんじゃ。よいね。
せいぜい ひめを おどろかせてやれ！」

「へい」けらいは こたえて、「でも、ひめさまが
きぜつしなきったら どうしますんで……」と、たずねました。
「そのままに わしが おばけをおいかす！
王さまは こさえました。
そのよる、めいていどおり けらいたちは
ひめのへやへ むかいました。

王さまは、けらいたちが
へやへはいったのを みとけますと、
それぞれが
「せっかくこの細く、そんでるのにじゃしましないで!!」
ひめは、いかえずと、主さまを、おだしてしまいました。

「おばけども、きえうせる!!」
ひめのへやへ、おどりこみました。
ところが、どうしたかでしゅう。
おばけたちは、おひめさまといっしょになって
ハンカチおじものを、しているではありませんか。
つきのあさ、マックロイは
さっそく けらいを よびつけました。
「ゆうべのざまで どうしたこことだ！
こんどこそしくじるな。
よいか、ひめはいま しろのにわを さんぼしとる。
すぐに とんびにへんそうして ひめを さらうんじゃっ」
「あの…… さらって どこへいきますんで？」
けらいのひとりが たずねました。
「よけいなことを いうでない！」
マックロイは しかりつけました。「どっかへいくまえに
わしが ひめを とりかえすんじゃっ」
主さまのごきげんをそこねて
やきとりにてもされても かないませんから、けらいたちは
いつくどおりに おひめさまを さらいました。
さあマックロイは そのすぐあとを おいかけます。
「おい、どんびどろ！ わしは からすの王マックロイじゃ。
ひめをかえさんと いきいめにあうぞっ！」
「やつ ごめんなさい」
「お越しごめんす」
けらいちは いそいでむきをかえました。そのとたんに、
「なにをするの。どんぶにけたなさいったら！」
おひめさまが めいとするではありませんか。
「どんびがからすにまけて はずかしくないの？
そら、もっとはばけて！」

マックロイの びっくりしたことったら。げられてしまったら
だいへんですから、あわてて となりちらしました。
「おい、おまえたち。やさとりだぞ！
じぶんが からすだってことを わずれるな！」
あなた、わたしの近くはうつっかかったり、ホッ……
それくらべて、このくったら、ホッ、こんなにあいのです。

おひめさまは、こうして、ぶじに、もどりましたが、王さまは、たくさん、さがされて、ますます、ぼかにされてしまいました。
そればかりか、おひめさまは、このごろ、じぶんのふるさとをおもいだしては、たれいきをつくようになったのです。

それをきいた、マックロイは、「よいし、わかった！」と、てをうちました。
王さまがかながえたのは、ペンキにいつけてこのくにをせかいいちうつくしいいろにぬりがえさせることでした。せかいいちうつくしいいろとは、もちろん王さまマックロイのはねとおんなじいろにきまっています。

マックロイのつもりでは、このくにがせかいいちうつくしくなれば、おひめさまはすっとここでくらしたいとおもうでしょうし、そんなよいことをなしごとげた王さまをうやまうにちがいないのです。
さあ、それがらが たいへんです。
ペンキは、かそく、ともだち、しんせきから
しらないひとまで かきあつめると、

ぐしゃみがでるのも ガマンして はたらきつづけ、
その白のようのうちになくそくどありのしごとを
やってのけました。
こう どこもかしこも まったくでは、
マックロイガ どこにあるのか わかりません。
その上に カナリヤのおひめさまは じぶんのくにへ
よっさと とんでかえってしまった。

つばのあさ、ぬめをしました おひめさまの おどろいたこと。
ににしる、みわたすかぎり まったくです。
おひめさまは つさに なこかいおうとしましたが、
これが主さまマックロイ。
でも その日から ごらんのことあり だあれのめにも みえません。